

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 平松 潤奈

平松潤奈氏の論文「寸断されたテキスト —— 『静かなドン』とソヴィエト文学体制の成立——」は、ショーロホフの長編小説を題材として取り上げ、その批評史を丹念に追うことを通じて、ソヴィエトにおける文学体制がいかにかに成立したかを論じたものである。

論文は三部から構成されている。

第1部は、『静かなドン』が順次発表されていくのに応じて書かれた夥しい量の批評を、三つの局面に分けて分析する。第一局面では、作家を思想的に批判するプロレタリア派が、「自然性から意識性へ」という方向を強く打ち出した。第二局面では、社会主義リアリズムの確立とともに文学が描くべき「客観的現実」が規定され、批評の中心は「客観的現実」に相応しい典型が芸術的に描かれているかという論点に移る。そして、第三局面では、社会主義リアリズムの規範に合致しない小説の結末をめぐる論争が起き、新しいソヴィエト的読者の立場から小説の価値が承認された。またこの第1部では、『開かれた処女地』第1巻をめぐる批評もあわせて分析されている。

次に第2部は、作品に描かれたコサックおよび女性という二つの形象についてそれぞれ具体的な読解を行う。そして、揺れる主人公が革命期の動揺するコサック全体の代表者となり、女性が非政治的存在であるがゆえにコサック解体政策の真の対象となったことが論証される。

最後の第3部は、検閲といわゆる盗作問題を扱う二つの章から成る。検閲を扱った章では、『静かなドン』の検閲記録の調査を通じて、検閲がいかにかにテキスト生成に作用したかが分析される。盗作問題を扱った章では、複数の主体が常に作品に関与する社会主義リアリズムの制度自体がこの問題に深く結びついていることが論じられる。

本論文は『静かなドン』の個別例が文学体制全体を論ずる場合にどの程度有効なのかという問題を残しており、また批評史を詳しくたどった第1部が分量的に突出しているという構成上の難点も見られた。しかし、二つの大きな課題に同時に挑戦して、顕著な成果をあげたことは確かである。すなわち、一方では、日本ではまだ本格的な先行研究のない『静かなドン』という長大な作品に取り組み、批評文献を博搜して、社会主義リアリズムの規範に収まりきらない、豊かな矛盾に満ちたこの作品の特質を解明することに成功した。他方では、ソヴィエトにおける文芸批評の展開と、制度としての社会主義リアリズムの確立の複雑な過程に新たな光を当てた。またロシアおよび欧米における先行研究の調査も行き届いており、スターリン時代文化研究の最先端の水準を踏まえたものになっている。

全体として見ると、歴大な資料の実証的調査と現代的な問題意識に基づいた鋭い理論的分析の両面をかねそなえた本論文が新たに切り拓いた視野は画期的なものであり、その成果は高く評価できる。それゆえ、本審査委員会は、この論文が博士(文学)の授与にふさわしいとの結論に達した。